

フクシマ連帯キャラバン(茨城行動)参加報告書

東北地方青年婦人部 部長 薄井 栄人

フクシマ連帯キャラバン茨城行動へ参加し、東海第二原発周辺30キロ圏内16自治体への要請行動を行いました。要請内容として、毎年組み込まれている広域避難計画についての内容に加え、今回は福島第一原発事故に伴う汚染水の海洋放出問題も組み込まれており年々要請内容についても情勢が変わってきていると感じました。3コースのうち、太平洋に面している5自治体の要請を行いました。広域避難計画については徐々にではあるが前進しているような印象を受けましたが、実際は過酷事故発生時の避難受け入れ先が決まった程度で避難方法等の内容は全く進んでいないのが現状でした。避難先についても一辺倒な考え方で風向き、複合災害発生時の対応できる方法まではどの自治体も達していませんでした。広域避難計画の策定にあたり、自治体からは国、県からの指示がないと計画を進められない所まで来ているとの回答もありましたが、実際は避難時に通過する自治体との連携等含めまだまだやらなければならない問題があることが現実にあることから各自治体が手を取り合いながら情報を開示して進めていかなければいけない問題であると今回の要請で強く思いました。汚染水の海洋放出についても自治体として強い意見はなく、地元漁連等の意見を吸い上げる環境は整っていない印象を受けました。11年前の事故当時、風評被害を受けている地域であることの意識が薄れているのかと感じ、福島第一原発事故が風化しつつある事実を突きつけられているような感情になりました。

今回、2回に分けてのフクシマ連帯キャラバンの開催になりましたが、新型コロナウイルスの影響もあり開催ができなかった2年間、その間にもこの運動を切らずに次に繋げていくことが大切と考え、規模を縮小してではありますがアピール行動や要請行動等の出来ることを行ってきました。しかし、その中でも原発事故後の問題は待たなしで様々な問題となり現実として突きつけられます。実際に福島第一原発が廃炉決定しても尚、問題が山積みとなっており、廃炉作業自体が何年かかるかも不透明な中、未だに原発事故で苦しんでいる人達がいること。それらを踏まえ、私たちは今後も原発事故を風化させない為、本当の復興の為、仲間や大切な人を守るためにフクシマ連帯キャラバンを力強く続けていく必要があると思います。そしてこの原発問題が福島だけの問題でなく、日本全国に立地している原発すべての問題であることを共有し、キャラバン行動を全国の仲間たちと団結し共に闘っていく活動にしていきたいと思えます。フクシマ連帯キャラバン隊としてできることは現地だけでなく、地元でもできることがまだまだあります。若い人たちにこの運動の大切さを伝えること、選挙へ行き自分たちの想いを伝えてくれる候補者へ投票すること、小さなことをみんなで行うことが大切だと思います。国を変えることはとても大きく大変なことですが、いつの日も大きな変革を起こせるのは市民の声と運動だと信じ、今後も仲間と団結し運動していきたいと思えます。

東北地方青年婦人部 副部長 小國 巧美

4月27日から29日の3日間で行われた茨城行動に参加しました。初日は結団式、初めにひたち支部の大門委員長と古内書記長から茨城行動に参加するにあたっての考え方や心構えを挨拶に交えて話していただきました。続いてキャラバン隊参加者挨拶を行い、16名個々の思いや考えを言葉にしました。その後、東海村村議会議員の阿部功志氏を講師に東海第二原発再稼働における現状と避難計画策定への課題を話していただきました。その中で、避難計画策定済みの自治体があるけれども、実効性のある避難計画を持っている自治体は一つもないという話を聞いて驚きました。11年前の東日本大震災を教訓に最低限できていて当たり前の避難計画が出来ていないわけがないと考えていたからです。言うまでもなく原発は日本各地で既に稼働しており、このような状況になった理由として原発受け入れ時に各自治体がおそらく安易に受け入れを容認していたのではないかと推察しました。自然と次の日の各自治体への質問内容がまとまる学習会となりました。団長選出も行われ、小名浜支部の齋藤書記長がいわき行動に引き続き団長の任に就くこととなりました。それと併せて、要請行動チームごとに意見交換、要請文の読み合わせと確認を行いました。私は各自治体をABCコースの3チームで周るうちのBコース6名に割り当てられました。Bコースの担当は那珂市、常陸太田市、常陸大宮市、大子町、城里町、水戸市の順で6つの自治体を周り、最後の水戸市では3チーム合同で要請行動を行うことを確認し、その後ホテルへ移動し、次の日に備え1日目を終えました。要請行動当日、出発前にキャラバン隊全員がホテル前に集合し、齋藤団長の挨拶で団員全員が気を引き締め、各担当自治体へと出発しました。私たちBコースは那珂市役所から要請行動をスタートしました。茨城平和擁護県民会議の相楽氏と合流し、庁議室に移動しました。ひたち支部の飯村君が要請文を読み上げ、意見交換が始まりました。自治体側の要請文に対する返答があり、避難計画の策定に関してはできていない、トリチウム海洋放出については海に面していないから関係はないとし、再稼働の賛否は明らかにしませんでした。初日の学習会での内容から避難計画未策定については予想できましたが、海洋放出に対しての考え方については共感を得ない回答となりました。確かに、直接的な関係はないにしろ、原発から30キロ圏内の市で、海に面していないからといって関係ないでは済まないと感じたからです。

次に常陸太田市役所ではひたち支部木村君、常陸大宮市役所ではひたち支部酒井君、大子町役場では私が要請文を読み上げ、城里町では小名浜支部松村君、水戸市役所では齋藤団長が読み上げ高橋市長に直接要請文を渡しました。結果、どの自治体も再稼働に対して賛否をはっきりとせず、実効性のある避難計画はなく国の方針に従うというのが本心ではないかと推察しましたが、原発を近くに置いている以上は最低限実効性のある避難計画策定は早急に作っていただきたいです。全ての自治体要請が終わり、県民文化センターでフクシマ連帯キャラバン茨城集会が行われました。コースごとに代表が報告を述べ、参加者全員が報告感想を発言して反省等を行い要請行動を終えました。3日目は解散式、総括が行われました。キャラバン参加者の行動を終えての感想を報告しました。東北地本新妻委員長、大門委員長、古内書記長から一人一人に対し

て行動を通して得たもの、そしてこれからの行動に生かすべきもの、行動を続けることの大切さなどをお話していただきました。初日から比べるとみんなの顔つきが変わったのが感じることができました。

今回、私はキャラバンに初参加でしたがキャラバン参加者との協力があって無事終わることができました。普段の活動とは違った緊張感を持ちながらの活動で同じ空気を感じることができる仲間との行動ができ、参加してよかったと思いました。行動の中身についても一回やって変わる行動ではなく、続けて変えていかなくてもいけない行動だと感じました。今回得たものを忘れずに次の活動に生かしていきたいです。

東北地方青年婦人部 ひたち支部 青年女性部 部長 木村 貴弘

茨城県には、日本で初めて作られた原子力発電所、東海第二原子力発電所があります。現在は運転停止中ですが、日本原電と国の方針では再稼働に向けて動いています。その為 “フクシマ連帯キャラバン茨城行動”として、UPZ 圏内の市町村に実効性ある広域避難計画が策定できない限り、再稼働を容認しないよう要請行動をしてきました。

私は B コースの責任者として 3 日間参加してきました。本コースは、山沿いの 6 市町村へ要請を行うルートとなります。首長への要請時に、いろいろな質問をしてみました。初めに「汚染水の海洋放出問題についてどう考えていますか！」と質問すると、「私たちの市町村は、海に面してないから汚染水の話は、話し合っていない。」との回答。この回答に対して愕然し、ふつふつと込み上げて来るものが有りました。海に面していないから考えなくてよいのでしょうか？海に面した市町村だけが考えれば良いのでしょうか？私は違うと思います。県全体、国全体で考えなければならない問題です。それを簡単に話し合っていないと言える首長がいる。それは絶対にあってはいけない事だと思いました。次に「再稼働して原発事故を起こした際、帰宅困難地域になりますが、自治体としてどう考えてますか！」と質問すると、「広域避難計画を慎重に作成します。」と話を濁されました。その場しのぎの回答しか出来ないのであれば、改めて再稼働なんかさせてたまるものかと感じさせられました。また、本コースに広域避難計画の策定が出来たという市町村があったので、その“実効性”について聞いてみました。そうすると「実効性についてはこれから」との回答。なぜ実効性ある避難計画の策定を求めているのに、実効性を考えるのは後からなののでしょうか。理解できませんでした。実効性を確かめてから避難計画ができたと報告すべきではないのでしょうか。再稼働する為の材料として作ったとしか思えません。住民の為のものではないように思えます。私たち住民をなんだと思っているのだと、ここでも憤りを感じました。しかし中には、東海第二原子力発電所の再稼働には反対の意向を示している市町村もありました。「実効性ある避難計画無くして再稼働はあり得ない。」と心強い発言もあり心の中では「その通りだ！！」と叫んでいました。このような自治体がどんどん増えていけば豊かな県、国になっていくと思います。これからも全力で再稼働を阻止、また廃炉にするまで活動しなければなりません。なぜなら廃炉までには、約 30～40 年をも要するからです。一刻も早く廃炉へと話しを進めなければ、次の世代までもが、原発への

不安を抱えながら生活をしなければならなくなってしまう。

最後に、この活動を全国へ広めていく為、私は脱原発運動をこれからも続けていきます。1日でも早い“再稼働阻止、廃炉”を勝ち取り、安心して暮らせる社会の実現を願って！

東北地方青年婦人部 ひたち支部 青年女性部 副部長 進藤 光夫

今回初めて、フクシマ連隊キャラバン茨城行動に3日間参加をしました。初日は東海第二原子力発電所の現状や恐ろしさ、再稼働をし、事故が起きた場合にどれだけの住民の命、そして故郷を失ってしまう人々がいるのか？また、事故が起きた時に避難は速やかにしっかりとできるのか？と本当にいろいろと学ぶ事ができた1日でした。そして2日目は3グループに別れ、原発再稼働反対についての要請文を提出するために各自治体を周りましたが、そこではなんとも言えないような反応がありました。結局訴えの声よりも当たり障りのないようなポジションで私たちは居続けますと言っているような感じで、あなた方自身の意見はないのか？所詮は他人事で片付けているような感じがして、正直この行動に意味があるのか？と不安と悔しさでたまらない気持ちとなりました。しかし要請行動が終わり、茨城集会で地元の方の話などを聞くと、やっぱりこの行動はとても大切な行動で自分達がこういった行動をする事で今、そしてこれからの未来を支えてくれる子供達のためにもこの活動は本当に必要だと再認識できました。自分の地域は影響ないから良いとかではなく、他人事で片付けられるような話ではないと深く思います。そして3日間の最終日は仲間と色々な話ができて本当に良い経験ができました。ここまでいろいろ動いてくれてサポートしてくれた方にも感謝しています。仲間の絆がとても深まる最高の経験にもなりました。今がどれだけ危険な状態か、そしてこれからどうするべきなのかをもっと周りの人達に広めていきたいです。とても濃い3日間本当にありがとうございました。

東北地方青年婦人部 ひたち支部 青年女性部 書記長 藤枝 知博

フクシマ連帯キャラバン茨城行動に参加しました。今回、茨城県庁を含む16自治体へ要請行動を行いました。どの自治体も原発再稼働についてのスタンスは曖昧でした。福島第一原発事故を一番近くで経験し、稼働から40年以上経つ老朽原発がすぐそこにある自治体として、それで良いはずがありません。先月の福島行動で感じた原発事故の悲惨さ、新たに課題となっている汚染水の海洋放出問題、実効性ある避難計画策定の難しさ、自分が今まで学んだ全てを自治体へぶつけてきましたが、正面から受け止めてくれる自治体はありませんでした。これが政治と戦う難しさなのだろうと感じました。しかし、自治体の中には原発再稼働反対の意を持っているところも少なからずあると思います。それを後押しするのは、紛れもなくそこに住んでいる住民です。フクシマ連隊キャラバンとして、福島の現状を伝え、原発事故を風化させない行動をここで止めることなく、この行動を通して得た経験を一人でも多くの地域住民へ伝えていきたいです。

今回、フクシマ連帯キャラバンで、福島・茨城行動の全日程に参加することができ、その中で一

番強く感じたのは、外の世界(状況)を知ってこそ、足元の行動に生きるということです。福島 of 行動を経験しなければ、茨城での要請行動をここまで力強く進めていけなかったでしょう。また、自治体との意見交換ができなければ、民意の重要さを感じることもなかったと思います。青年部活動として、これほど外の世界を知ることができる行動は他に無いと思います。今回結集した素晴らしい仲間と共に行動できたからこそ、私の今後の活動の根源となるようなキャラバン行動が出来ました。原発のない社会を実現するため、まずは地域の運動を盛り上げ、全国へ広げていきたいと思っています。

東北地方青年婦人部 ひたち支部 青年女性部 幹事 宮下和樹

今回のキャラバンで私は二つのことを学ぶことができました。まず一つ目が原発再稼働問題についてです。初日は東海第二原発についての学習会があり、東海村で行われている村議会の動き、実効性ある広域避難計画策定への課題を知ることができました。その後の意見交換会では、各市町村の原発再稼働、広域避難計画についての考えを学習することができました。原発の恐ろしさを改めて実感することができ、翌日の要請行動へ向けての気持ちを作ることができました。二日目の要請行動で一番残念だったのは、自治体によっては何の危機感もないような返答が返ってきたことです。地域によって賛成・反対どちらとも答えを出せないような返事がくることには納得していましたが、住民の命に関わる問題だということにあまりにも考えがまとまっていないなと感じました。二つ目は仲間との交流です。コロナウイルスの影響によってなかなか他支部との交流ができない状況で、最初は初めて接する方たちとの活動に少し不安を感じていましたが、キャラバンという活動を協力して行っていくにつれ、徐々に絆が深まっていくのを感じ、全港湾はこういう団結があるからこそ大きな力があるんだと実感しました。

今回の行動では、自分の知識不足を感じました。市町村ごとの考えや置かれている立場、住民の人数、世帯数などを把握して要請行動に挑めば質問の幅が広がり、より意義のある回答をもらえたかもしれません。掘れば掘るほど情報はまだまだあると思うので、次回のキャラバンに参加するまでには、原発再稼働問題や他の活動に対しての知識を蓄えながら、交流を深めつつ、成長していきたいと思っています。

東北地方青年婦人部 ひたち支部 青年女性部 幹事 酒井 人士

今回初めてフクシマ連帯キャラバン茨城行動に参加しました。先輩方から話を聞いていたのですが、実際どのようなことをするのか内容が分からず、また他支部の方たちと行動をするという部分ですごく不安がありました。しかし、それと同じくらい楽しみでもありました。

初日、講師の方のお話を聞き、翌日の行動に前向きになってきました。A.B.C 班が決まっていた自分はB班でした。まさか要請書を自分も読むとは思っていなかったなので、すぐ練習をして正直そのことばかり考えていました。夜は熱い話をしながらみんなかなり打ち解けあうことができ、すごく

楽しい夜になりました。やっぱり全港灣楽しいな、いい人たちだなと思いました。2日目、要請行動当日。はじめての要請行動また要請文を読むことに緊張がありました。しかし、先輩が要請する姿などを見て自分もやってやろうという気持ちが強くなり、緊張したけれどしっかり要請することができたと思います。その後 A.B.C 班合流したときに思ったことがあって、ほんとにみんな心強い仲間だなと改めて思いました。また、この人たちとならいろんな行動をしていきたいとも思いました。要請行動終了して反省会があり、自分はなにも出せなかったけれど先輩方がいろんな反省点をだしていてすごいなと感じました。もし次、自分がまたキャラバンへ参加することがあれば、はじめての後輩たちを引っ張れるかっこいい先輩になりたいと思うと同時に、今回のキャラバン行動を忘れず次に活かしていきたいなと思いました。3日目は残念ながら参加できませんでした。最後まで参加できなかったのが心残りですが、ひたち支部含め他の支部の方々と昼間は本気で行動し、夜は仲間たちの熱い思いなどを聞いたりしてほんとに自分が成長できたなと感じます。また機会があれば是非参加したいと思います。その時コロナが終息していればみんなで飲み明かしながらもっと仲良くなりたいなと思います！

次回、沖縄平和行進も参加させていただくので本気で取り組んで他の支部の方達とも協力して仲良くなって自分ももっと勉強して成長していきたいです！今回はキャラバン隊参加させていただいてありがとうございました！

東北地方青年婦人部 ひたち支部 青年女性部 幹事 倉持 美樹也

今回、フクシマ連帯キャラバン茨城行動に初めて参加し、心に残るものがたくさんありました。まず初めに自ら参加する活動には、精神面や肉体面でたくさんの疲労を伴うと感じました。しかし、それと同時に達成感とやりがいがありました。活動の全日程が終わった後は、心地よい感覚がありました。2つ目は、他支部の方々と活動が出来たことです。私は、コミュニケーションがあまり得意ではありませんが、話しかけてくれたり、質問をした時には快く聞いて、分かりやすく教えてくれました。普段はひたち支部で気軽に聞いて教えてもらっていますが、それが他の方に出来るか不安でした。しかし、先輩でも、後輩でも関係なく団結して活動に参加できました。3つ目は、今回のキャラバンでの主な活動です。茨城行動のひとつとして要請書を各自治体で読むことに、簡単にできる事ではないと改めて実感しました。笠間市役所で要請書を代表で読んだ際は、緊張や焦りなどで不安が込み上げてきました。また、要請書の内容を理解できていない箇所もあり、代表者として不甲斐なく感じました。これからの活動でどう補っていけるかが、自分の中での課題となりました。そして各自治体で、一番印象に残った事は、広域避難計画について完成ではないが、出来たと云わざるを得ない状態なものしかないと感じました。定義自体が曖昧で、複合災害などの対応がしっかりしたものとは思えませんでした。確かに全ての災害を危険予知して作ることは、事実上は不可能だと思います。ただし、国や県に限らずお互いの自治体同士で意見を組み合わせれば、もう現実的な避難計画が作れるのではないかと思います。初めての経験や知識不足でいたらないこともありましたが、自分の中とてもいい経験が出来ました。

東北地方青年婦人部 ひたち支部 青年女性部 幹事 飯村 将弥

私は、今回のフクシマ連帯キャラバンに参加して普段経験できない様々な事を経験できました。初日は、東海第二原発についての学習会で原発が再稼働したらどのような事が起こるのか、どのような危険性があるのかについて学習しました。仮に原発再稼働が現実のものとなり、大地震などの不測の事態が起こってしまった場合、放射性物質が漏れ出し、自分達の働く港は避難区域になってしまうため長い期間立ち入りが出来なくなる。また、作事中に事故が起こった場合、逃げるのがかなり難しくなるなど様々なことを学習できました。この学習会で、原発の再稼働は自分達にかなりリスクのある事だと思いました。原発再稼働によって原発のある東海村は村が潤うというメリットがあるのかもしれませんが、デメリットを考えると再稼働をするのは危険だと改めて考えるようになりました。2日目は各自治体に原発再稼働反対についての要請書を提出しました。内容は原発再稼働における避難計画の策定と福島第一原発事故によって生み出された汚染水を海に放出することについてでした。自分達が回った自治体では、多くの所で避難計画を策定していない、もしくは避難計画は出来ているが、もし事故が起きた時、本当に実効性があるかの実証まではしていないという回答でした。汚染水については、いずれも海に面していない自治体に要請したため国の方針に従うという考えの所がほとんどでした。要請行動で感じたことは、どの自治体も原発再稼働についてははっきりと賛成か反対かの意思表示をしづらい状況なのかなということです。もし反対だと考えていても、周囲の自治体の考えが明確ではないため、自分達だけ冷やかな目で見られてしまうのではないかと考えてしまうと中々はっきりと意思表示するのが難しいのだらうと思います。しかし、城里町だけは、はっきりと反対の考えを持っていて凄いなと感じました。自分達の活動で少しでも再稼働について反対だと考えている自治体の後押しをすることになれば良いなと思いました。

茨城行動での経験を通し、原発が再稼働となった場合、自分達にどのような危険が及ぶのか、自分達の住む地域でどのような影響があるかなど、様々な事を考えられ、とても意義のある行動となりました。今回の経験を少しでも多くの人に話し、原発の危険性について広めて行けるようにしていきたいと思いました。

東北地方青年婦人部 ひたち支部 青年女性部 千代谷 公平

今回、私は初めてフクシマ連帯キャラバン茨城行動に参加しました。このフクシマ連帯キャラバン茨城行動は、東日本大震災、福島第一原発事故から11年が経ち、未だ不透明である避難計画が策定できない状況において原発の再稼働を容認しないという事とトリチウム汚染水の海洋放出は漁業者をはじめ、約束を反故にするものであり政府に海洋放出方針の見直しと再検討を求める。という要請文を各茨城県内の自治体に提出する要請行動でした。また、それに伴う学習会と意見交換が主な活動内容になっています。まず、初日は東海第二原発再稼働に係る裁判の内

容や村議会の動き等、また各自治体の避難計画・広域避難計画策定への課題などを学習会で学びました。意見交換の際には、東海第二原発の再稼働について話し合いをしました。昨年水戸地裁が東海第二原発の再稼働をしてはならないという判決を出しましたが、東京高裁に移った差し止め裁判も長引く可能性があり、私はこのキャラバン活動ですぐに何かが変わるというわけではないと思います。しかし、この活動を続けていくことで、少しずつでも改善していくことが大切であるという事を学びました。2日目に、私はAコースの東海村、北茨城市、高萩市、日立市、ひたちなか市に加えて全体参加の水戸市に要請行動をしました。各自治体それぞれの考えがあり、中には国や県任せの自治体等もありました。今回我々が問題定義を行ったことで、今後住民の声に耳を傾け、この問題に対してしっかりと向き合ってもら。そういった言動が次回以降、各自治体に垣間見ることができれば自分たちのキャラバン活動は「やって良かった」「成功した」と言い切れると思います。

今回のキャラバン活動に初めて参加した感想として、自治体へ意見を言う機会というのは日常生活ではあまりありません。私も自分の住んでいる日立市で要請文を提出しましたが、質疑応答含めて自治体の方々と直接意見を交わせたことは今後の自分にとってもいい経験になりました。原発問題に関しては今後も注視しつつ、関心を持って生活していきたいと思います。

東北地方青年婦人部 小名浜支部 青年部 部長 矢内 誠也

4月27日から29日の3日間参加しました。27日は結団式をおこない、次の学習会では東海村村議会議員の阿部先生の講義を受けました。裁判の内容や、議会の動き等を聞きましたが、原発反対派の意見についてはひどい回答や、無視されたりと、有り得ない内容だと聞き、改めて次の日の行動がどれだけ大事なのかを理解しました。また、その後の意見交換会の中で、各自治体の原発に対する賛否の方向性について確認をしたり、それぞれの自己紹介や想いを話し、お互いの意志を確認しあいました。翌28日には要請行動に入りました。3班に分かれて行動をおこない、私はBコースを担当しました。初めはなかなか同じ組になったメンバーも発言は多くありませんでしたが、行動を進めていく中でひとりひとりが想いや質問を話せるようになってきたように感じました。各自治体の反応は、言葉を濁して具体的な回答をもらえないことがほとんどでしたが、このキャラバンという行動については毎年ご苦労さまですと、認知していただけてるなと感じました。今後も継続をして訴えていくことが大切だと感じました。翌29日には総括として、それぞれの感じたこと思ったことを発言しましたが、初日とはみんな全然違う顔つきや話し方になっており、やはり良い経験になる活動なんだと感じました。

改めて3日間のキャラバン茨城行動でしたが、ひたち支部をはじめ、各参加者の協力と団結により、この活動ができたこと改めて感じております。本当にありがとうございました。

東北地方青年婦人部 小名浜支部 青年部 副部長 渡邊 健也

2022年フクシマ連帯キャラバン茨城行動として東海第二原発と自治体との関係性、広域避難計画の課題を学び、茨城16自治体に要請行動をしました。原発再稼働賛成の自治体や、否定はするけど明確な声として出すことのできない自治体があること、様々な意見があることを学びました。福島で実際に原発事故を経験した自分達は、原発事故が起きたことによって生まれた「被災者」「風評被害」「汚染水問題」など11年経った今でも解決できていない現状を自治体に訴えました。この訴えで原発事故の危険性や本当の復興の難しさを少しでも感じてほしいです。また、広域避難計画の課題は、避難ルートは決まっているが地震等の複合災害であった場合の道路状況などが考慮されていない現状であり「実効性の伴う避難計画策定」でないことです。原発事故が起きて実際に避難しようとしてもできないのでは無意味な計画でしかなく、もっと真摯に考え、もっと地元住民の命を大事にしてほしいと思いました。

自分達ができることは、原発事故を経験し大変だった体験談や、現在福島に住む地元住民の思いを伝え続けることです。毎年やることによって昨年は後ろ向きだった自治体が前向きに変わってもらえた自治体もあり、継続することの大切さを学び、自分達でも変えられる自信にもなりました。3日間と限られた時間の中で自分達ができることを探し、実行できたことに達成感も得られました。コロナ禍で人数の制限もありながら集まった仲間感謝し、フクシマ連帯キャラバンの活動を全国、世界に発信していきたいです。1つの目標に向かったこの仲間と共にこれからも団結して頑張っていきたいです。

東北地方青年婦人部 小名浜支部 青年部 書記長 齋藤 直道

フクシマ連帯キャラバン茨城行動に団長として参加してきました。フクシマ連帯キャラバンいわき行動から団長を務め、今回自分の中でテーマを決めて参加しました。「福島原発事故と同じ事故を繰り返してはならない」をテーマに行動しました。このテーマにした理由としては、原発事故が起きればさまざまな問題が起こります。汚染水問題、補償の打ち切り、風評被害、甲状腺ガン、地元への帰還不能、避難経路の確保など、私自身が原発事故による被災者だからこそ、二度と起こしてはならない事故、また、原発事故は天災ではなく人災であると伝えなければならない思いを持って、茨城行動に参加しました。茨城行動の要請では、各自治体の考えや思いを聞き、福島県の隣県なのになぜ福島原発事故を教訓にせず、再稼働反対の意思を表明しないのかと、とても憤りを感じました。また、広域避難計画について避難計画を策定した自治体の話を聞くと考えが甘いと思いました。第一次避難計画場所は決めている自治体がありましたが、風向き次第では第一次避難場所も影響を受けるのでそこまで考えて避難計画を立てて欲しいと思いました。避難計画に対して、実効性ある避難計画は絶対にできないと改めて感じました。

今回フクシマ連帯キャラバンいわき行動、茨城行動の団長を務めこれから若い世代がやらなきゃならないことはたくさんあると思いました。一つ目は、選挙活動です。各自治体の首長を決めるのは住民だからこそ選挙に行き自分が推薦できる人を選ばなきゃならないと思い、支部に戻り選

拳の大事さを伝えなければならないと思いました。二つ目は、原発事故を風化させないことです。福島原発事故の問題、被害の実態を一人でも多くの方に伝えていけば、原発はいらないという意見が少しずつでも多くなると思うので若い世代が発信していくためにもフクシマ連帯キャラバンは毎年行わなければならないと思います。また、団長として参加し、フクシマ連帯キャラバンは福島の問題だけではなく全国の問題として発信し、全国の仲間と取り組まなければならない行動だと思えます。フクシマ連帯キャラバンに参加すれば、行動中に仲間ができ、近くに原発がある仲間から話を聞くことで地元での活動に活かすことができます。全国の仲間と取り組むことで脱原発に向けての明るい未来へ繋がると思えます。キャラバンの最後には達成感もあり、涙を流す人もいます。組織として、みんなで作りあげ成功し、仲間が増え、同じ気持ちを持って問題に向かっていくことがこれから若い世代に一番大事で必要なことだと思いました。

最後になりますが、自分自身とても成長できたフクシマ連帯キャラバンでした。

東北地方青年婦人部 小名浜支部 青年部 幹事 松村 海斗

今回初めてのフクシマ連帯キャラバンに参加しました。内容は原発を再稼働させないためにキャラバン隊で茨城県の自治体に要請書を提出するというものです。私は3コースのある内の B コースへ参加し東海村にある原発から30キロの範囲に入る自治体を一つ一つ回り首長の元を訪ねました。今回呼びかけたことは今、茨城県で東海村にある原発で事故が発生した時に避難計画を作成しているかということでした。実際に話を伺うと、曖昧な回答が返ってきました。自治体が原発のことをどう考えているのかと疑問に思いました。また、福島第一原発事故で出たトリチウム汚染水の処理が今大きな問題となっています。国の意見は薄めれば海に流してもいいだろうという事です。そんな事は絶対やっていけないですし、漁業者の方の身にもなって欲しいと思えます。そして海で生きる魚達の命を大切にしてほしい。私たちだって、魚の命を頂いて生きているという事です。そんな勝手に海に流すのは無責任にも程があると思えます。私が要請書を読んだ町は城里町で町長は原発に反対と聞き嬉しく思いました。そして城里町長の出身がいわき市だそうです。しっかり反対と言ってくれる自治体が増えると良いなと思えました。最後の水戸市では全ての班が一緒に集まり水戸市長に意思を訴えました。市長は実際、原発再稼働は慎重派で市民の意見を聞かないとはっきり反対とは断言はできないと話していました。その後、フクシマ連帯キャラバン茨城集会の会場に向かい各コースのリーダーの発表があり、前からやっている人からは前の首長と代わっていたりしているが、いい方向に向かっているところもあると話していました。そういう自治体が増えてほしいと思えました。

最終日は 1 人ずつ参加してみでの感想を発表しました。私は実際に避難指示を受けた浪江町から避難してきた者として言えることはやっぱり小さい頃から育った町を離れるのはすごく寂しいという事です。なので、来年以降もひたち支部の方々をはじめ、他の地方や支部の方々と一緒に原発再稼働を絶対にさせないために力を合わせて訴え続けていきたいと思えました。

東北地方青年婦人部 小名浜支部 青年部 幹事 鈴木 太一

4月27～29日の3日間、2022フクシマ連帯キャラバン茨城行動に参加してきました。1日目は結団式の後に、東海村村議会議員の阿部さんから東海第二原発再稼働に係る現状や避難計画策定への課題についての学習会が行われました。学習会では、東海第二原発再稼働の現状や避難計画がなかなか進んでいない現状を知りました。その中でも、東海村議会での横暴な強行採決は、今の民主主義の時代にはあり得ない本当に酷い議会が行われていると知りました。この問題について阿部さんは、世代間の倫理に反する。今の世代が、若い世代に核廃棄物や廃炉の問題などを押し付けることになると言っていました。私は、先月参加した福島県の県民集会やニュースでも若い世代が原発に対しての興味や知識が無いという現状を感じていたため、このままでは私達や今後の世代が苦しむ事になると感じ、改めて危機感を感じました。2日目には、要請行動に参加しました。要請行動では3班に編成し茨城県16市町村を回りました。私の班では、東海村、北茨城市、高萩市、日立市、ひたちなか市、最後に3班集体し、全員で水戸市に要請行動しました。一箇所20分と短い時間でしたが、とても貴重な経験をしました。原発廃炉や避難計画、トリチウム汚染水の海洋放出などについて、対策や解決策をととても丁寧に詳細を説明する市町村もありましたが、あまりにも中身がなく対策、解決策を考えていない所もあり、とても温度差を感じ残念に思いました。中でも私が感じたのは、原発より距離が離れば離れるほど関心が無くなっているということです。その自治体が関心の無いことは、その地域住民の興味も無いことだと思い、改めて原発事故を経験した私達、福島県民が伝えて広めていかなくてはならないと強く感じました。基本的には、県や国の指示を待つとの回答が多かったため、改めて私達に出来る事を考えると選挙やデモ行進、集会などの大切さに気付かされると同時に行動しなくてはならないと感じました。要請行動の後には、報告集会に参加しました。報告集会では、各班の発表やキャラバン行動の歴史を学びました。今までずっと闘い、訴え、行動してきた方々や先輩方の姿を見てとても心強く感じ、大変勉強になりました。この2日目を通して大変難しく貴重な経験をし、やり切る事で私は精一杯になってしまいましたが、一緒に行動した先輩方の反省会を聞いていると、意識の高さ、本気さに大変驚きました。その中で、私の2日目の反省点も見つける事ができました。要請行動で質疑応答の機会を頂いた際に、私は質問や相手方の答えを待つだけになってしまいましたが、自分が原発事故で避難した経験や想いを相手方に伝えられたら、質疑応答の幅を広げられたと感じ、勉強になりました。この2日目は、私が経験した組合活動で一番辛く、疲れましたが、物凄く貴重な経験になりました。

今回のフクシマ連帯キャラバン隊行動に参加し感じた事は、まだまだ原発の廃炉には時間がかかるということです。原発の廃炉には30年から40年かかると言われていますが、私たちの次の世代にも関わってくる問題だと感じましたし、廃炉だけではなく、原発は戦争での標的になってしまうなど様々な問題があると知りました。しかし、今回の3日間の行動で少しでも良い方向に向かって行けたと感じたので、今回の行動で終わりにするのではなく、この行動や考えを若い世代に広め、伝えて最終的には良い方向に考えを変える人が増えていけば、原発の問題は長い年月は掛

かと思いますが、明るい未来に変えていけると確信しました。この3日間は、要請行動だけではなく、自由時間を制限された中でも他支部との交流で、協力し、互いの意見を交わしながら成長する事ができ、楽しむ事が出来ました。仲間の大切さを改めて知る事が出来るのもキャラバンの奥深さや、大事にしないといけない所だと感じました。今後も積極的に参加したいと思えるような貴重な3日間を過ごす事が出来ました。

以上